



### 3 各作品の概略と価値

以下、これらの作品の概略・価値・発見されたことの意義等について述べてみたい。

#### (1) 未発表詩2編について

馬 子供を蹴つて殺した馬が/今日も牧場で草をくふ。//あの山ふもとに子供の墓が/  
白く小さく見えてゐる。//子供を蹴つて殺した馬が/墓の方へ向いていないた。

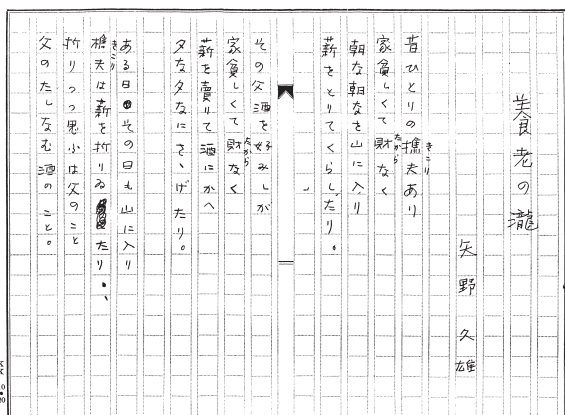
2行3連の短詩であり、主情的、心象風景的な作で、いわば少女趣味的傾向が強い。注目すべきは「大正10年9月9日」の日付が記されていることである。大正10年といえば作者は矢掛中学校5年生であり、級友高木甲一らと共に同人誌『余光』を発行するなど、文学に目覚め、詩作への意欲もかき立てられていた時期である。

記録に残る詩としては、「風」「おしの」の2編が大正10年作で、木山の最も早い時期の詩として『木山捷平全詩集』に登場する。したがってこの「馬」も前記2編と同列に扱われるべきであり、文字通り詩人木山捷平の「草創期」の詩作への意欲の横溢した注目すべき詩である。

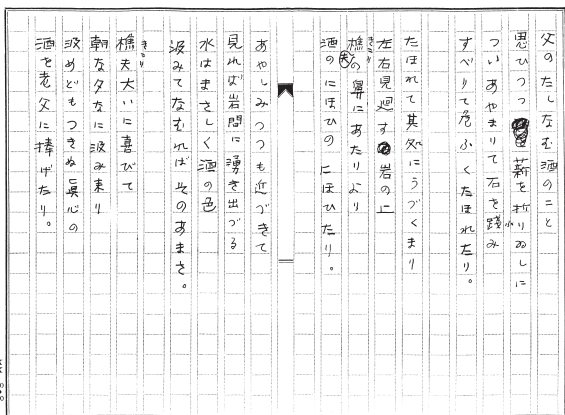
「養老の瀧」は矢野久雄の筆名で書かれた、七五調八句(4行)7連から成る文語定型詩である。「養老の滝伝説」のストーリーを忠実に詩の形にまとめ上げた、典型的なバラードであって、感動の奔出というよりもむしろ詩作への真摯な情熱と強烈な執念の漲溢した詩である。

また、この詩稿には、欄外に「市外大久保百人町三五三 木山捷平」という署名が添えられていることにも注目したい。木山捷平がここに居住していたのは昭和6年であることから、この年に作られたことは明らかである。昭和6年といえば木山捷平(27歳)は結婚した年であり、また第二詩集を出版するなど、ある意味で生涯で最も充実していた時期である。この詩をなぜ発表しなかったのかは定かではない。当時の詩壇の趨勢からして、叙事詩などは発表するに値しないと判断したのか、あるいは何か発表をはばからねばならぬような事情でもあったのであろうか。

昔ひとりの <small>きこり</small> 樵夫あり 家貧しくて財 <small>たから</small> なく 朝な朝なを山に入り 薪をとりてくらしたり。	父のたしなむ酒のこと 思ひつつ薪を折りぬしに ついあまりて石を <small>ふ</small> 踐み すべりて危ふくたほれたり。	樵夫大いに喜びて 朝な夕なに汲み来り 汲めどもつきぬ真心の 酒を老父に捧げたり。
その父酒を好みしが 家貧しくて財なく 薪を賣りて酒にかへ 夕な夕なにさゝげたり。	たほれて其処にうづくまり 左右見廻す岩の上 樵夫の鼻にあたりより 酒のにほひのにほひたり。	
ある日その日も山に入り 樵夫は薪を折りゐたり 折りつつ思ふは父のこと 父のたしなむ酒のこと。	あやしみつつも近づきて 見れば岩間に湧き出づる 水はまさしく酒の色 汲みてなむればそのあまさ。	



市外大久保百人町三五三 木山捷平



発見された未発表詩の原稿の一部 (笠岡市立図書館提供)

さらに後年、みさを夫人が編集した『木山捷平全詩集』が三茶書房（昭和62年）から、と講談社文庫（平成8年）からと都合2回刊行され、いづれにも「未発表詩篇」欄が設けられているが、どちらにも上記の2編の詩（「馬」「養老の瀧」）は載録されていない。これらの詩をみさを夫人が「載録の価値なし」と判断して棄却したとは到底考えられない。とすれば、編集時点でどこかに埋もれていたか、あるいは見落としたと考えるのが妥当である。こうした意味からも、今回この2編の未発表詩が発見されたことの意味は大きい。また、当時の木山の詩に対する姿勢や詩の傾向、さらには詩的世界の形成発展過程をより深く知る上からも意義深いことはいうまでもない。

(2) 未発表の小説 11 編について

「美しい心」「燭の出せなかつた徐吾」「ナポレオンの給仕人」「褒め過ぎの失敗」「鐘乳洞窟の秘話」「犬の堂」「吾子を門に入れなかつた子発の母」「黄金白壁よりも節を重じた貞姫」の8編の掌編は、日本国内及び中国・フランス・イタリアの逸話や物語などに取材したもので、題材そのものは陳腐ではあるが、旺盛な創作意欲の奔出を感じることができる作品群である。しかも「美しい心」と「燭の出せなかつた徐吾」の2編には、「市外小松川四ノ六八 木山捷平」の署名があり、「ナポレオンの給仕人」と「褒め過ぎの失敗」の2編には、「市外大久保百人町三五三 木山捷平」の署名がある。ということは、前者は昭和4年に書かれたことを意味し、後者は昭和6年の作であることの証左である。それはまぎれもなく、木山の創作活動のスタート時点の作品群であることを裏

付けるものであり、したがって木山の創作活動開始当時の作品の特色（特に題材と内容）を知るうえで貴重な資料といえる。

そこで、各作品の概略を簡潔に記してみよう。

① 「美しい心」＝マリーというフランスの貧しい農家の娘が、祭りの晴れ着を買うために町に出かける。路傍で貧しい老人が泣いているのを見て、自分の晴れ着を買うつもりであったお金を全部与えて、すがすがしい気持ちで帰宅する。「矢野久雄」の筆名で書かれている。また冒頭欄外に「乞御採用」と記され、末尾欄外には「市外小松川四ノ六八 木山捷平」の署名がある。

② 「燭の出せなかった徐吾」＝斉の国、東海のほとりに住んでいた徐吾は仲間の李吾らと燭をともして夜業の麻を紡ぐ。ところが徐吾は貧しくて自分の燭が出せぬので李吾らは徐吾を非難し排斥しようとする。徐吾は部屋の掃除や仕事場の整備などに精出して仲間に奉仕し、「私一人が居ても居なくても燭の明かりが増減するわけでもないので、仕事の仲間に入れてほしい。」と哀願する。李吾は返す言葉もなく自らのあさましい心に恥じ入るのであった。

③ 「ナポレオンの給仕人」＝微行の好きな皇帝ナポレオンは近衛大将ヂウロッキー人を連れて宮城を抜け出る。街頭の料理店で朝食をとるがあいにく兩人とも財布を忘れ、支払いに窮して女将から非難されていると、その店の給仕人が代わりに支払ってくれる。その厚意に感激したナポレオンは、この給仕人に壺千フランを与え、さらに側近として召しかかえる

④ 「褒め過ぎの失敗」＝イタリアのある画家が、少女が苺の入った籠をもった絵を描くと、一人の友人が「本物の苺と間違えて鳥が来て啄いた。」とその出来栄えを吹聴する。それを聞いた見物の一人が「では、少女の出来栄えは余程よくなかったようだ。鳥が人間を怖がらずに近寄って来たのだから。」とその矛盾をあばき、かえって絵の欠点暴露される仕儀となる。

⑤ 「鐘乳洞窟の秘話」＝吉野朝時代、大早魃<sup>かんぼつ</sup>に見舞われた年、ある寺の和尚が長門秋芳の滝穴に入り祈雨の断食をしたあと、自らを生け贄<sup>にえ</sup>として淵に身を投じる。すると、たちまち恵みの雨が降り作物はよみがえる。そこで村人たちは和尚の仏像をこしらえ、生仏としてあがめ尊ぶ。その後も、早魃の年にはこの仏像を炎天の下に出せば、不思議に雨が降るといふ。——ちなみに原文を掲げる。

長門の秋吉の滝穴——鍾乳洞は、その奇勝を以て天下に聞え、春夏秋冬多くの探勝者がひきもきれない。鍾乳洞の大洞窟からは、年中こんこんと美しい清水が湧き出て、一つの小川となって、その谷一面の田の水に引かれてゐる。この鍾乳洞にまつはって一つの悲しい物語がある。

それは、吉野時代のことであったといふ。ある年の夏、長い長い早魃が打ちつづい

た。村の人達はその恐ろしい大旱魃に、どうすることも出来ず、ただ手を組んで空を仰いで、天を恨むばかりであった。

洞窟から余り離れていない所に一つの寺があった。和尚は実に親切な人で、村の面倒をよく見てくれる僧であった。

村人も亦、朝晩この寺の鐘をきいて、淳朴な信仰をつないでゐた。

「どうしたらよいであらうか。」

和尚は一人で思ひに耽った。もうあらゆる手段は尽きている。

「さうだ、自分の信念を仏にさゝげて、喜びの雨を乞はう。」

和尚の胸に電のやうな刹那の光がきらりとひらめいた。

その夜、和尚は日頃から肌身に離さない経本を手にして寺を出た。そして、洞窟の中深く入って静坐の場所を定めて、日頃から信念してゐる観音菩薩に向つて、断食をして祈念をはじめた。

それから一日過ぎ、二日過ぎ、三日過ぎたある日、ごろごろと低い雷鳴が大地をふるはせて鳴りはじめ、見る見るうちに黒雲が滝穴の上の方に湧き上つて来た。それが段々空一面に広がったかと思ふと、天地を轟かすやうな雷鳴が二つ三つとゞらいて、大粒な雨がさんさんと降つて来た。

村人は手に手に鍬を持って田へと急いだ。今にも枯死しようとしてゐた稲田が、見る見るうちに青々とよみがへつて来た。それを眺めた村人の喜びはたとへやうもない程の嬉しさであった。

ところが、やがて寺の和尚の身を氣遣つたが、誰にもその安否が判らない。あれこれと噂とりどりに不安な一夜を明かした。

夜が明けてみると、和尚は川下の或る人の田圃のほとりに死体となつて懸つてゐた。和尚はついに、洞窟の淵に自ら身を投じて、仏に念願したのであった。しかしそのお蔭で、村人は長く生をつなぐことが出来たのであった。

和尚は村人の手によって丁寧に葬られ、霊骨は砕いて灰にして和尚の仏像をこしらへ、生仏としてあがめ尊んだ。

そしてその後も、旱魃の年にはこの仏像を炎天の下に出せば、不思議に雨が降つて来、田や川の水がなくなったことが無いといふ。

⑥ 「**犬の堂**」 = 宮津の海巖寺と文珠寺の間を毎日手紙をもって往復する忠犬がいた。悪戯好きの小僧がいたずらをして犬を死に追いやるが、やがて小僧は自らの非を悔いて犬のために堂を建てて供養し、善良な僧となる。

⑦ 「**吾子を門に入れなかつた子発の母**」 = 戦国時代、楚が秦を攻めたときの話。楚の子発將軍は兵糧に窮し、楚王に調達を要請したついでに母の安否もうかがう。使者を迎えた母は、兵卒は粗食に甘んじているのに子発だけ美食していることを聞く。やがて

子発が凱旋したとき、母は子発の美食を非難して門に入れず、越王勾踐の所行——部下に醇酒や乾飯を分け与えてねぎらった話を語って開かせる。恥じ入った子発は母に謝罪し、やっと門に入ることを許される。「素木風雲」の筆名で書かれている。

⑧ 「黄金白璧よりも節を重んじた貞姫」＝夫の白公の死後、夫人の美貌に魅せられた呉王は、金三千両と白璧一雙を代価として王妃になつてくれと要求する。が、夫人は白公の墓を守って生涯白公に事えたいと拒否する。呉王はその節を重んじる心に感じ入り、貞姫と名付け称える。

このように題材はすべて国内外の逸話や奇談から取り、内容もまた善行を賛美したり美談を翻案したりした教訓的な作品ばかりである。文学というよりも修身の教材といった色彩が濃い。だからと言って、価値が低いという評は当たるまい。すでに述べたように、これが木山文学の黎明期の作品の特色であり、これらを通して木山の創作にかける意気込みを如実に看取することができるからである。

なお、すでに述べたように上記①②の原稿には、欄外に「市外小松川四ノ六八 木山捷平」と記されており、③④の原稿には、「市外大久保百人町三五三 木山捷平」の記載がある。ということは、前者は昭和4年に執筆され、後者は昭和6年に書かれたことの証左である。こうしたことを通して、私たちは木山の創作の黎明を明確にとらえることができる。すなわちこれらの未発表原稿を通して言えることは、木山捷平の年譜の「昭和七年五月……詩作より創作に進む。……」という記述は、間違いとは言えないまでも必ずしも正鵠を射ていないということである。木山の創作活動はすでに昭和4年に始まっているのである。これら未発表原稿は、こうした点を明らかにするという意味でも貴重である。

⑨ 「るなか娘」は都会に住む結婚生活25年の多根子が、夫の出張中、田舎での小学校時代を回想するという内容の作品である。「うけとり」「尋三の春」「一昔」など、初期のいわゆる「学校小説」の系譜に位置づけられる性質のものである。男子生徒の悪戯に辟易する様子、悪戯に対する先生の処罰の様子、県立女学校受験準備の様子、受験地へと赴く様子などが生き生きと描かれている。「うけとり」や「尋三の春」とほぼ同じ時期に執筆したものと思われるが、両者に比べると「やま」がなく、主題の芯も欠けている。しかし、木山文学の発展過程を知る上では貴重な資料である。

⑩ 「暗闇祭」は、武蔵国吉祥寺村から、大国魂神社の歌垣に赴く二人の娘の心境と見聞を赤裸々に描いた作品である。執筆時期は不明。木山の小説で、これに類するいわゆる「歴史もの」は数が少なく、他には「和気清麻呂」「姉妹道」の2編があるにすぎない。そうした意味からも貴重な作品といえそうである。

⑪ 「七日月夜」は、ストーリーがあまりにも奇想天外で、娯楽小説としては成功を収めているが、「暗闇祭」と同じく純文学といえる作品ではない。主人公が新制中学校



の美術教師として登場するので、戦後書かれたものであることだけは確かである。

### (3) 「赤木先生」について

「赤木先生」は、昭和8年『東京週報』第11号(11月26日発行)に掲載された木山捷平の小説の第4作である。『東京週報』は大久保海洋が創始し、東京週報社から隔週刊の文芸雑誌として刊行されていたものである。

この「赤木先生」は、2年後に『早稲田文学』に発表された名作「尋三の春」の原型である。ところが作者自身も不本意な作であるとの理由からか、のちのちの創作集に収録しないばかりか、自らの半生を語る自伝的著述などでも触れることはなかった。一方、名作「出石城崎」は「出石」が原型であるが作者はその「出石」に強く愛着し、その執筆の経緯から発表後の世評に至るまでこと細かに語り、果てはその原作までも自らの作品集『わが半生記』(永田書房刊)に収録しているのである。

また「赤木先生」の存在は無視されがちで、「木山捷平年譜」(みさを夫人執筆)などからも割愛されることが多かった。したがって評論家や研究者の間でもほとんど話題にされることなく、長い間忘れ去られていた作品である。これが今回見つかったということは、この作品に改めて光を当てるだけでなく、当時の文壇の事情や文士仲間の動向などを知る上でも大きな意味を持つ。それにも増して、同胎の「尋三の春」の成立と推敲の過程、さらには木山捷平の文学的成長発展のあとを知る上できわめて貴重な作品といえる。

木山捷平は昭和8年3月、大鹿卓・太宰治・古谷綱武・神戸雄一・塩月越・藤原定・今官一・新庄嘉平・岩波幸之進らと同人誌『海豹』を創刊。創刊号に処女作「出石」を発表して作家生活に入る。同誌3号(5月)に第2作「うけとり」、7号(9月)に第3作「子に送る手紙」と力作を発表し、好評を博す。続いて第4作「赤木先生」を同誌8号(10月)に発表するつもりでいたらしいが、『海豹』が仲間割れして廃刊(昭和8年9月『麒麟』『小説』への合流話が持ち上がり、12月10日解散)になったため、やむなく『東京週報』に投稿したと推察される。しかし先行3作品に比べると著しく見劣りすることは、木山捷平自身も気付いていたに違いない。だからこそ添削と推敲を重ねて大幅な修正を施し、「尋三の春」に改題して2年後『早稲田文学』に発表するのである。

こうした木山の努力と精進のあとを検証する意味から両者を比較してみる。

(1) 「赤木先生」は単なる過去の出来事として綴られているのに対し、「尋三の春」は明治45年の出来事を20数年後に回想するという形で書き進められている。ということは、後者にはドラマ性が意識的に付加され、作品そのものの文学性を高めるとともに、味わい深いものになっている。

(2) 前者は約15枚、後者は約80枚。話題やストーリーを豊かにし、読みごたえのあるものにしようとする意図が明白にうかがえる。

項目 \ 作品	赤木先生	尋三の春
分量	◦ 400字詰原稿用紙約15枚	◦ 400字詰原稿用紙約80枚
時点	◦ 単なる過去の出来事	◦ 明治45年のできごと（回想）
主要人物	◦ 校長、当番教師、土井先生（転任） ◦ 赤木久太郎先生（新任） ◦ 矢野改策（「私」） ◦ 笠原医院の息子 笠原克己 ◦ （別の場面では「山下医院」とあり統一を欠く）	◦ 校長、申本先生（転任） ◦ 大倉先生（新任） ◦ 須藤市太（「私」） ◦ 山本医院の息子 山本春美 ◦ 親父、母親、妹
構成（場面）	◦ 赤木先生の新任あいさつ ◦ 「読方」の時間 ◦ 笠岡古城山への遠足 ◦ 赤木先生の転任（12月） ◦ 赤木先生を見送る	◦ 尋二から尋三への進級の経緯 ◦ 大倉先生の新任のあいさつ ◦ 「修身」の時間 ◦ 「読方」の時間 ◦ 笠岡古城山への遠足 ◦ 妹への土産、父の激怒 ◦ 水晶取り、妹の怪我、父の暴力 ◦ 「図画」の時間 ◦ 山本春美との喧嘩、両成敗 ◦ 大倉先生の転任（9月）
文章表現	◦ 陳腐で平凡	◦ 洗礼され躍動感に富む。
主題	◦ 赤木先生への感懐	◦ 市太の尋三1学期間の生活の哀歓 ◦ 筆者の描く理想の教師像 ◦ 醜い教育界への批判

(3) 前者は5つの場面構成、後者は10の場面構成。ここに作者の構想が入念に練られ、深められていった苦心のあとをうかがい知ることができる。これが作品を重厚なものとするだけでなく、登場人物の行動や性格を多方面から描き上げ、人物像や主題を具体的かつ鮮明にうたいあげることに成功している。

まず「尋三の春」での冒頭の場面——須藤市太の3年生への進級のとき、落第させられそうになり、親父が担任の先生に呼び出されて進級を哀願し、やっと進級がかなうが親父からひどい折檻せつかんを受ける——の設定は、当時の貧しい農家の現実を如実に描きだすとともに、劣等生市太少年の爾後の勉学ぶりと大倉先生の教育手腕を明らかにするための背景をなすすぐれた書き出しとなっている。

次に後者における「修身の時間」の設定では、大倉先生の「肩の凝らないリラックスした授業ぶり」や「旧来の勉学の秩序を破った斬新な授業ぶり」を活写し、「図画の時間」では大倉先生の「生徒の勉学への意欲」をかきたて、「やればできるという自信」をもたせる指導ぶりを如実に描き出し、両者に描かれている「読方の時間」（合理的な授業）と同様、作者の求める理想の教師像を見事に演出する効果をあげている。

さらに後者では「図画の時間」の結果が原因で発生した山本春美と須藤市太の喧嘩けんかを、大倉先生が「両成敗」「簡潔明快な叱り方」で処理している場面を設定することによって、



作者は「<sup>ひいき</sup>鼠貞のない教育」「公平正大な教育」という理想の教育のあり方を描き出そうとしているのである。

こうした堅実な学校生活を展開させる中途に挿入した「妹への土産」や「水晶取り」の場面では、貧困な農家の様子を生き生きと描き出している。そして貧困なるがゆえに荒んだ父親の心、またそれによる父親の暴力に堪えながら健気に勉学に励む須藤市太の生きざまを赤裸々に描き出すことに成功している。しかもこれらの場面挿入が、ややもすると単調になりがちな筋の展開に絶妙な変化を与え、作品を躍動的にする効果をもあげているのである。

(4) 前者と後者の同じ場面でも、後者では著しく詳細かつ克明に描くことに意が注がれている。これにより作品内容が重厚になり、また、事件の展開や人間像が飛躍的に生き生きとしたものになっている。

例えば、「読方の時間」に「私」（須藤市太）の発言に抗議を申し込んだ生徒を、前者ではただ「村一番金持ちの笠原医院の息子笠原克己であった」とだけ記しているのに対し、後者では次のように述べている。

見ると、それは山本医院の二番息子の山本春美であった。山本医院は村一番の分限者で、春美は二年生の時までは級長をしていたが、三年生になってからは副級長にもして貰えず、平の生徒になっていた。多分大倉先生が鼠貞をしなかったためであろう。少なくとも私たち生徒仲間ではそういう風評であった。級長の職権をかさにきて生徒の並び方が悪いと言って編上靴で（春美は学校中でただ一人靴をはいていた）私達の素足を蹴って歩かないだけでも、皆がどんなに嬉しかったか知れない。

また、笠岡古城山への遠足の場面。前者では——「よう気をつけて行くんぢやど。みんなのものにはぐれんやうに」とその前の晩、梅干し入りの握り飯をこしらえへながら、母が私に言つてきかせた。「笠岡の町にや、海があつて船が浮いとる。浜を汽車が通つとるし郡役所もあるし、裁判所もあるし……——よう見て来んされよ」——と言って送りだされているのに対し、後者では

——けれども私は遠足の朝、親父から五銭白銅一つしか貰えなかった。それは如何にも残念でたまらなかったので、「三造さん等あ、十五銭も貰う言うとった」と友達を引合いに出して見たが、親父は取り合ってくれなかった。「ぬかすな。三造さん所あ、分限者じゃないか。その割ならお前にゃ一銭か五厘しかやれんのじゃど」 どう返事をしてよいやら困っていると、母親が古筆子の<sup>ひきだし</sup>抽斗をかき廻して、赤銅貨を五つ、そっと私の掌ののせてくれた。——とあり、貧しい農家の現実の姿、父親の心情、母親の心配りなどを具体的に描き出している。

さらに、古城山頂で昼食する時の様子は、前者では——松の根本に腰を下して、竹の皮包の日の丸弁当を食べてゐる間も、私たちはやたらに海に向つて声を張り上げた。弁当を食べ終ると、はしゃぎきってゐる私たち三四人は、少しはなれて矢張り弁当を食べてゐる

赤木先生のところへ行つてかう言ふ質問を試みた。先生は生徒たちと同じやうに握り飯を両手につかんで食べてゐた。……すると赤木先生は、やうやく弁当を食べ終わつて、しゃぶつてゐた梅干の種を前の松の幹に性急に投げつけるが早いか、つと立ち上つて私をつかまへて抱き上げた。……赤木先生はもう一度私を大きく左右に揺すぶつて、それから地上にどつと降した。そして私をその大きな掌でぐるぐる撫でまはした。撫でられながら仰向いて見ると、先生の顔はほんのり上気して、その黒い瞳が海よりももつと美しく輝いてゐた。

——このように、対赤木先生との個人的かかわりに力点をおき、それを主観的、情動的に描いている。いわば視野の狭い捉え方である。(もっとも、前者は「赤木先生への思い」が主題であるから、これで結構である。)ところが、後者では次のように描いている。

城山の頂上まで登りきると、そこの広場で海を見ながら背中の握飯を開いた。山本医院の春美だけが一人巻鮓まきずしを持って来ているのが人目をひいた。大倉先生は矢張り握飯で、私達と一緒に並んで頬張りはじめた。見ると、先生はおかずに目刺を持って来ていた。私達の大半は梅干や沢庵であつたが、そこは何といつても先生だけのことはあると、私は考えた。ところが、先生はねちねち噛んで食べるので、いちばん最後になってようやく食べ終わった。食べ終ると食い残した目刺の頭を、くるくるつと新聞紙にまらめてポケットにおし込んだ。間髪かんぱつをいれず、「先生、それ芥溜場に捨てて来てあげましょうか」と、山本春美がききしがした。すると先生は、にっこり笑つて、答えた。「いいや、ええ。これはな、先生の家にひよこを飼うとるけん、往んでからひよこにやるんじゃ」

——このように、後者ではより広い視点から、客観的に先生と生徒(「私を含めて」)をながめ、しかも大倉先生と山本春美の人間像(境遇・性格を含めて)を、克明な人物描写を交えながら的確かつ生き生きと描き出している。前者に比べるとはるかに優れたとらえ方、描き方である。まさに作者の苦心彫琢ちやうたく躍如たる個所である。それはまた、作者の文学的成長の著しさを如実に物語るものである。

この古城山での昼食時風景はさらに「食事が終わると自由時間が与えられた。五十人の生徒は、広場の一隅にたっている三、四軒の物売り茶屋になだれをうっておし寄せた。あれほど今まで感嘆した海も、物売り茶屋ほどの魅力を集中しつづけることは困難だったのである。」と筆を進める。生徒たちが物売り茶屋にかけ込んで、われ先にと買い物に興じる場面、山本春美が仲のよい友達に高級菓子をふるまっている場面などが活写されたあと、須藤市太の行動描写にに焦点がしぼられる。——須藤市太は飴玉と煙硝紙を買い、さらに蜜柑水を買って飲む。あまりのおいしさに妹への土産に買って帰ることを思いつく。

——「小母さん、蜜柑水は壘ごとでも売ってくれるかな？」と小声で訊いて見た。「ええと、壘ごと？ そうじゃな、壘ごとなら、四銭」小母さんは胸と相談しながら答えた。四銭！ 私の心はおののいた。こんなおいしい飲物は家の者は誰もまだ知らないだろう。それを買ってかえって皆んなに味を知らせてやろう。妹のうれしそうな顔がちら

ちらと目の前で笑った。懐ろをさぐるまでもなく、小遣はあと四銭だけ残っていた。私はその全部を投じて一本の蜜柑水を受取ると、ひとり松林の中に駆け込み、急いで空になった弁当風呂敷に包みこんだ。松の葉ごしに見える瀬戸内海が今は蜜柑水色に輝いていた。――

須藤市太の躍動する心が生き生きと描破され、この作品における最も心の高揚する場面を作り上げている。(しかし市太のこうした厚意は、帰宅後父親の激怒にふれ、無残にも打ち砕かれてしまう。)前者にはこれほどまでに心の高揚する場面もまた暗転する場面もない。こうした点にも、作者の創造力の深化と文筆力琢磨のあとを見ることができるのである。

(5) 文章表現――前者は用語、叙述、描写ともに平凡、陳腐であるのに対して、後者は琢句が行き届いているうえに、「右顧左眄」「磯馴松」「豹変」「間髪を入れず」等々、琢磨された用語が駆使されている。それに擬人法、比喩、景情一致の描写など、修辞にも磨きかけられ、一段と洗練された文章になつている。

(6) 主題――前者はただ「赤木先生への思い」という通俗的なものであるのに対し、後者は、①「市太少年の小学3年生のころの生活の哀歓」、②「作者の描く理想の教師像」、③「醜い教育界への批判」など、幅広くかつ格調の高いものになっている。

(7) 先生の転任の理由――前者では、噂話として「赤木先生が村から追い出されたのは、山下のお医者<sup>さんげん</sup>の讒言によるものだ」ということを作中人物に語らせている。後者ではこうした説明はなく、それは「大倉先生が、有力者(山本医院)の息子、山本春美に最厚をしなかったことへの報復処置である」ということを、行間から読み取らせる配慮が施されている。こうした点に後者の作品としての格調の高さが秘められている。それはとりもなおさず、作者の小説執筆の力量が長足に伸長したことを意味するものである。

「赤木先生」を原形とする「尋三の春」は、上述のように内容的にも一段と彫琢が加えられ、構成力・文章力ともに飛躍的な進歩をとげ、正に木山文学の初期を代表する名作となる。換言すれば、「尋三の春」は新進気鋭の作家木山捷平が「一皮むけた」記念すべき作品なのである。長い間忘れ去られていた「赤木先生」こそは、名作「尋三の春」への一大跳躍台となった貴重な作品である。ちなみに、この「尋三の春」は後年中学校の国語教科書(東京書籍)に載録される。また海を渡って中国では、大学の日本文学の教材(北京大学編「日本文学選」)として用いられるだけでなく、中国語に翻訳されて小学校の教科書に採載されるなど、日本文学を代表する名作としての地位を得ているのである。

なお、稀少作品『野人』の初版本発見の意義にも言及したいが、紙幅が尽きてきたので他日を期したい。

## Unpublished Manuscripts and Rare Material of Shohei Kiyama

Tsuneji SADAKANE

*Courses in Japan Studies for Students from Overseas*  
*Kurashiki University of Science and the Arts*  
(Received October 1, 2011)

Unpublished manuscripts and rare materials of Shohei Kiyama (1904-68), a novelist who was awarded the 1962 Minister of Education's Art Encouragement Prize, were found at Kasaoka Municipal Library in August 2010, when more than 40 years had passed since he had died.

As Shohei Kiyama was a popular novelist with a unique personality, the event was reported by a lot of newspaper companies (Sanyo Newspaper reported it twice, carrying it on the first page once), and became a big topic among researchers of Kiyama's literature.

Asked to identify the manuscripts and other materials by the Board of Education of Kasaoka City, I made a careful examination, and it turned out that two poems and 11 novels had been written by Shohei Kiyama but not yet published.

In this paper, statements are made on the "literary value" of his works, including these unpublished manuscripts, and "meaning of the finding" of them.

The finding was made by Hayao Okuno, assistant director of Kasaoka Municipal Library, during the rearrangement of about 1000 manuscripts and letters which had been donated by Mrs. Misao Kiyama in setting up the Kiyama Shohei's section in 1988.